テクノロジーと法の未来へ

Vol.08

「プログラミング×教育」コロナで大きく変わった一年

国際情報学部国際情報学科2年
私立佼成学園女子高等学校（東京都）出身
松倉 妃那（まつくら ひな）

新型コロナウイルスは、私の大学生活を大きく変えました。行動範囲は制限され、人との出会いや新しい挑戦の機会も失われました。しかし、私は新型コロナウイルスによって変わったものすべてが悪いことだとは感じていません。なぜなら、この状況下だからこそ生まれた思考によって経験できたこともあったからです。

私の大学生活のスタートは、新型コロナウイルスによって高校生のときに描いていたものとは異なるものとなりました。後期は週に1回キャンパスに通うことができたものの、前期は1度も通うことができず、2カ月ほど家にずっと閉じこもる日々でした。このような生活を変えたいと思い、「趣味を職に」と本屋でのアルバイトを始めたのですが、このご時世で今年の2月、アルバイト先の本屋は閉店してしまいました。この事実を受け、閉店のショックを感じると同時に、また時間を無駄にしてしまうかもしれないという焦燥感に襲われました。

そんな中、何かほかに自分の興味のあることで活動できることはないかと探していたところ、「学校応援プロジェクト」を見つけました。これは中央大学が、主に多摩地区の小・中学校・高校向けに展開する取り組みで、「グローバル教育プロジェクト」「プログラミング教育プロジェクト」「キャリア教育プログラム」「いじめ防止教育プログラム」の4つから構成されています。この取り組みに参加する学生を募集していると知り、iTL1年次の必修科目である「プログラミング基礎」で得た知識と経験を活かして、初学者なりに何か役に立てることがあるかもしれないと思い至りました。そして、私が関心を持っている「教育」についての気付きを得る機会になるかもしれないと考え、学生が中心となって小学生や中学生にプログラミングの授業を行う「プログラミング教育プロジェクト」への参加を決意しました。

このプロジェクトでは、小学生や中学生に行う授業を学生が一から考え、組み立てていくことができます。すでにこのプロジェクトに参加している学生たちの様子を目の当たりにし、感銘を受けたことから、自分も挑戦してみたいと思いました。今年は参加から日が浅いため、授業内容についていけない生徒・児童をサポートするスタッフとして、授業者が作成したスライドの改善にかかわりました。また、事前に授業者の授業を受けたうえで、生徒・児童へのより良い伝え方を授業者とともに考えました。今回の授業ではScratchという言語を使用しましたが、本番で生徒・児童からどのような質問をされてもいいように、この言語についての理解も深めました。というのも、自分が大学で学んだのはC言語だったからで

す。C言語とScratch、この2つの言語を学んだ結果、それぞれ見た目や組み方は異なるものの、考え方など根本的な部分は同じであることもわかりました。

これらのことを踏まえ、下準備を行ったうえで本番に臨みました。結果的に成功を収めることができ、さまざまな収穫も得ました。特に強く感じたのは、自分が当たり前に理解していることや可能だと思っていることにも疑問を持つ姿勢が大切だということです。生徒・児童たちは、私が当たり前と思っていたことにも多くの疑問を持っていました。この気付きがあったからこそ、生徒・児童とともに考える中で新たな発見がありました。

そして、今回の経験を活かして日常的にプログラミングを教えたいと思い、プログラミング教室の講師アルバイトを始めました。iTLの授業で習得したC言語に加え、独学で学んだScratchもこのアルバイトの役に立っていると実感します。新型コロナウイルスによってさまざまな機会の喪失がありましたが、それによって生じた時間を別のことに使ったからこそ得られた経験があったと考えると、新型コロナウイルスが私にもたらした影響は、必ずしも悪いことばかりではなかったと思います。今後はアルバイトでの学びを活かし、「子どもたちにもっと楽しくプログラミングを学んでもらうにはどうしたらよいか」という課題に取り組みながら、多様な観点からプログラミング教育に関する活動を続けていきたいと考えています。